

ココが聞きたい！

市民から弁護士へ 直撃インタビュー

face-to-face interview



市民の視点で、
弁護士の方に仕事や
現在の日本社会など、
「ココが聞きたい！」と
思うことをインタビュー
いたしました。



上八丁堀法律事務所

弁護士 久保 豊年

●昭和34年1月3日生 ●昭和52年 広島城北高等学校卒業
●最終学歴 明治学院大学法学院法律学科卒業・最高裁判所司法研修所卒業
●平成元年4月 弁護士登録

Q:これまでの事件で一番印象に残っている事件はなんですか。

— 刑事事件で、ペルーやった事件があつて、その弁護人をやつた事件ですかね。その人は、日系3世のペルーハンですけど、広島で働いていて、小学校1年生の女の子を帰宅途中に殺してしまったという事件で。あれは、メディアも注目していましたし、印象に残っていますね。



Q:どんなところで印象に残っていますか。

— 彼のキャラクターも印象に残っていますね。けっこう明るい人で、殺人とかをやる感じではなかったんですよね。小学校1年生の女の子なので、軽い気持ちで近づいたという感じでした。

Q:弁護士の仕事のやりがいはどういうところですか？

— みんな何らかのSOSを持ってくるので、それに対して一番合理的な解決方法を見つけてあげて、一緒に解決していく。そして最終的には喜んでもらえるっていうのがやりがいじゃないですかね。

Q:あるドラマの中で「勝訴は正義」という風に描いていたんですが、そのことについては、どのように思いますか。

— 勝訴は正義？ 勝てば官軍という話かな。うへん。。。勝つ負けるというよりも紛争をいかに早く、依頼者にとってできるだけ有利に解決できるかということが最善だと思っているので。勝訴っていうのは裁判の話で、裁判になるっていうことはかなり時間が経っているということだから、あんまりいい解決じゃないと僕は思っていますけどね。裁判になる前に然るべき示談で解決していくのが一番クライアントにとっても良いことだと思っています。

Q:弁護士から見た日本社会は、どんな社会ですか。

— でかいね、そりやまた話が(笑)。そうだね。。。弁護士から見た日本社会としては、まず日本の刑事司法っていうか刑事裁判の世界でいうと、ものすごく世界から遅れていると思いますね。

Q:それはどんなところがですか。

— ひとつは、逮捕したら他の先進国は、すぐ保釈という制度があるんですけど、日本の場合は、基本的に2~3日間、保釈はないんですね。これは先進国ではありえないですね。

Q:保釈という制度にはどんなメリットがあるんですか。

— だってずっと警察に入れられているんですよ。本人にとっては、会社にも行けない、学校にも行けない。しかも自由が拘束されている。デメリットだけじゃないですか。

Q:もし犯人だったらそれはしょうがないのではないかでしょうか。

— 犯人かどうかっていうのは、裁判で決まるわけだから、まだ、逮捕されているだけですよ。まだ、何も決まっていない状況で長期間、身柄拘束がされてしまうんです。

Q:日本のその制度は、不合理というかよくないことでしょうか。

— 良くないというか、非常に野蛮ですね。だから早く釈放されたいから嘘の白をしてしまうとかいうことも有り得てしまう。

Q:以前、本で冤罪を掛けられるということを読みました。ずっと質問をされて、自分はやっていないのに、早く帰りたいから、罪を認めないと帰れない、だから、罪がないのに認めたりとかそういうことがあると。

— そうそう。そういうことが起きるんですね。日本の場合。外国の先進国の場合は、逮捕されたらすぐ保釈が普通なので、そういうことがないんですね。取調べも大体1~2時間が普通です。日本の場合、2~3日間ですよ。毎日、7~8時間、もっと長いときもある。

Q:それはちょっと厳しいですね。

— 厳しいというか野蛮ですね。有りえないくらい野蛮。それから取調べに先進国の場合弁護士が立ち会うんですよね、刑事と対峙して。日本の場合は立ち会えない。

Q:それはなんですかね。

— 調べにくいくらいじゃないですかね。弁護士がいると邪魔だからじゃない？日本の憲法で黙秘権っていうのが保障されているんですけど、これは実際なかなか難しいんですよね、本人で黙秘権行使するっていうのは、行使するのが難しいから、隣に弁護士がいてアドバイスをしてあげることが重要だと思いますね。だから弁護士から見た日本の刑事裁判の世界は非常に野蛮で後進国だと思っています。

Q:それを改善する方法はあるんですか。

— 改善する方法は、国会議員に法律を変えてもらうしかないですね。そういう運動を弁護士会としても盛んにやっていますけど、なかなか変え





てくれません。なぜでしょうかね。

Q:どうしてでしょう。

— 多分、一般の人が逮捕される人は既に有罪だと思っているからじゃないでしょうかね。

Q:何も知識がない一般的の人はそうかもしれませんね。

— ということは、逮捕イコール有罪だと思っていることが、非常に教育が不足している。



やはり小学校の頃から裁判とは何かとか、この人に嫌疑をかけるということがどういうことなのかということを教育のカリキュラムとして取り入れていくことが非常に重要だと思います。そういう状態がフェアなのか、例えば、小学校である人の財布がなくなったりという事件が起きたとして、誰かが盗ったんじゃないかなというときに、その誰かを犯人にするときっていうのは、どういうことがあれば犯人と言えるのかっていうのは法律を知らないでもわかるじゃないですか。誰かが目撃したとか、その人のカバンに財布が入っていたとかということを言われて、犯人にされてしまうと。そういう時に、その人を弁護する人をつけてあげて、この人はみんなとずっと一緒にいたんだから一人になってないから犯人ではないという弁護をする人がいて初めてフェアになるんじゃないかなといったゲームをやるとか。そういうことでフェア感を学ぶ。だから逮捕されたことによって有罪じゃないんだと、そこに弁護士が入らないことはフェアじゃないということを小学生のうちからきちんと教えることが重要じゃないかと思います。

Q:弁護士という職業にかかわらず、学生時代にやっておいた方がいいということはありますか。

— 一つはアルバイトですね。アルバイトって社会の中に出していくということなので、そこでの人間関係とかお客様との関係とか、従業員同士の関係とか、店長とか社長との関係とかの上下関係とか、いろんな基本的な関係を学ぶいい機会だと思うし、それでお金をもらうわけだから、ある意味プロだし。縮図だと思います、社会の。

Q:どういうアルバイトがいいですか。

— どんなアルバイトでもいいと思います。

Q:学生の時は、勉強の時間とバイトの時間とはどのように調整していましたか。

— アルバイトの時間以外で勉強するっていう感じかな。アルバイトは行かないといけないからね。

Q:趣味とか何がありますか。

— 当時から野球をしたりとか、サッカーしたりとかバスケットしたりとかを友達どうして遊びでしてましたね。

Q:今も仕事が終わった後、リラックスするために何かしていますか。

— ジムに行ったり、ゴルフの練習したりとか。音楽聞いて、あとバンドをやっているので、僕ボーカルなんですよ。バンドの練習したりとか。ハーモニカを吹いたりするので、その練習したりとか。あと映画が好きなので、映画見に行ったりとか。ビデオでため込んで見ちゃう。あと小説を書いてるので、小説書くのが趣味っちゃ趣味ですね。

Q:小説！出版したりとか。

— したいですね。まだしてませんけど。

Q:今はどんな風に時間を調整していますか。

— やるべき仕事が終わったら、そういう時間に使ってますね、飲みに行ったりとか(笑)。僕はけっこ余暇が多いと思いますけどね。仕事にそんなに長い時間は使ってないです。

Q:難しい事件があるときはどうしますか。

— 難しい事件があるからって言っても、長い時間考えたりとかはないですね。

集中的に考えて、ぱっと遊びに行きます(笑)。一晩中悩んだりとかそんなことはないです。

Q:お客様と付き合うときはどんなことに気を付けていますか。

— 弁護士に会いに来る人はいろいろ緊張してくるので、できるだけフランクに優しく、友達みたいに付き合うようにしてますね。夜と一緒に食事に行ったりすることが多いですね。

Q:落ち着くようにしてもらうようにですか？

— 食事してお酒を飲むとフランクになるじゃないですか。こういうところ(法律事務所)で話をします。できるだけそうしてますね。

Q:他の職業との共通点もありますね。

— そうですね。基本的にサービス業ですからね、弁護士は。

Q:他の職業と違うところはありますか。

— 他の職業というか、いわゆるサラリーマンと違うのは時間が自由になりますよね。休日を設定するのも自由ですし、何時に来て何時に帰っても自由ですし。その代わり、決まったお給料をもらえるわけではないので、毎日毎日、相談受けたり、事件解決したりしないと維持できない。そういう意味では、止まつたら倒れちゃうというのはありますよね。

Q:仕事に対しての考え方の違いとかありますか。他の職業との明らかな。

— 他の仕事ってあまり正義とか考えないんじゃないですかね。弁護士の場合、それが一番公平とか、論理的にはこうあるはずだということが先行することがありますよね。そこは違うかな。

— 逆に聞きますけど、今まで弁護士に相談したり、相談したいと思ったこととかはない？

Q:相談したことないですね。ただ、バイト先で自分の対応が悪かったのかもしれないけどあるお客様が暴言を吐いたり、お金を投げつけるような感じで置いたりしたことがあります。その時、私は怖くて何も言えなかったんですけど、私が悪くないのに何故謝らないといけないのかなっていうのを思ったことがあります。

— 何か不始末をしましたかと聞くのが日本的かもしれないですね。日本の場合は、まず謝罪するよね。海外行って一番びっくりするのは謝罪しないことだね。肩ぶつかってソーリーとかあるけど、昔、飛行機に乗って荷物がなくなったときに、海外の航空会社は色とかを聞いてくるだけ。まずは謝れよって思うんだけど、航空会社を代表して謝罪するとかいうことはないよね。私のせいじゃないもんっていう感じ(笑)。前に、アメリカに行ったときに4回ロストバゲッジになったんだよ。最後、コードシェアでJALで帰ってきたとき、やっぱり荷物がなかったんだけど、JALの人は、まず「申し訳ございません」って言ってくれたからね。僕は、思わず「ありがとうございます」と言ったよ、初めて謝ってくれたよって言って(笑)。そういうのが日本人だろうね。

インタビュー
李午梅さん
ええね広大！
学生広報ディレクター
広島大学大学院
教育研究科



インタビューの感想
もっと固いイメージがあつたんですけど、柔らかいイメージでした。ドラマでの弁護士のイメージしかなくて、法律知識もないので、どんな質問をしていいか迷っていましたけど、話しやすかったです。